帰去来

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
帰去来

【Ｎコード】
Ｎ５９３５Ｚ

【作者名】
シン

【あらすじ】
ハロウィンの日、学生時代から嫌いだった厭な男、ビルから『失恋した』という電話がかかって来た。
彼は酒を煽り、時には涙を零しながら、その失恋話を延々と続ける。カボチャや魔女が犇めき合い、お菓子が山と積まれる部屋で。
ハロウィンの今日、ビルはその子と逢う約束をしていたのだ。それなのに、その子は来なかった。
だけどぼくは、ビルの失恋話を笑う気には、なれなかった。
なぜなら……。

失恋　？

学生時代から、厭な奴だった。

愛称、ビルは、ニュー・イングランド地方の名家の御曹司で、名門私立高校（レッブスクール）から東部名門八大学（アイビーリーグ）の一校に進学した正真正銘のヤッピーで、地域社会で敬われていた彼は、自らがこの国を動かしている、とさえ思っていたのだ。

ＷＡＳＰ（ワスプ）（Ｗｈｉｔｅ．Ａｎｇｌｏ　Ｓａｘｓｏｎ．Ｐｒｏｔｅｓｔａｎｔ）と呼ばれる彼のような一部の白人が全てそうだ、という訳ではないが、好んで付き合いたい、と思える人種では、なかった。

傲慢で、厭味で、貧乏人など見下し、そのくせ、施（ほどこ）しだけはきっちりと与える。

教会にも通っている。

そういう名家の御曹司としてのスタイルが、彼には生まれながらに染み付いていたのだ。

アメリカの多くの地方では、彼のような名家の御曹司が実力者として慕われるが、このニューヨークではそうは行かない。ここでは、本物の実力者でなければ、相手にされないのだ。

だが、まずいことに、アイビー・リーグで四年間の学部を終了し、大学院で修士号（マスター）まで得た彼は、その本物の実力さえ持ち合わせていた。

ニューヨークで成功したのだ。

それでも、彼を慕う者はいなかった。

結果、彼は、故郷での人々に敬われる生活を望み、地元から自分の言うことを利くイエス・マンを呼び集めた。その取り巻きたちを側に置き、我が物顔で振る舞い始めたのだ。

今では、彼のことを〝ビル〟と親しみを込めて呼ぶ人間は、その取り巻きたちだけになっている。他の者は、彼の正式名、ウィリア

ムで呼び――いや、そのファースト・ネームで呼ばれている分には、まだいい。厭味のセンスを持つ人間なら、彼のラスト・ネームにサーの称号をつけて呼ぶだろう。もちろん、彼がその称号に相応しい人間だ、という意味ではなく、全く別の意味で。

ぼくは、彼をビルと呼ぶ取り巻きの一人だった。

従兄弟である、といえば、まだ体裁がいいが、実際には、大学へ行くために彼の父親に資金を援助してもらった、という、一歩下がらざるを得ない立場である。

ビルもぼくも、互いに今年、三十歳になる。

そんな折り、ビルから一本の電話がかかって来た。――いや、その話をする前に、彼のここ二月間の様子を付け加えて置かなければならないだろう。

失恋　？

ビルは、この二月近くの間、屋敷に取り巻きたちを呼び付けることもなく、仕事が終わればすぐにイースト・サイドに構える豪勢な屋敷に戻り、どこにも出歩くことはなかったのだ。

そして、十月三十一日の今日、彼は浴びるほどに酒を飲み、強かに酔った口調で、ぼくに電話をかけて来た。

「失恋したんだ……。すぐに来てくれないか」

行きたくなど、なかった。ハロウィンの今日、ぼくは近所の子供たちにお菓子をあげることを楽しみにしていたのだ。――いや、その後、子供たちに冷やかされながら、彼女と食事に行くことを。

だが、従兄弟ということもあり、彼の父親に恩もあり、加えて、イエスとしか言えない立場の人間であったため、ぼくは渋々、彼の屋敷へと足を運んだ。

失恋していい気味だ、と思うよりも、彼に恋人がいた、ということの方が驚きだった。彼のような傲慢な人間に、どこの誰が付き合っていたのだ、と思ったのだ。

だが、別にそれを聞きたいとは思っていなかった。少なくとも、今日は。

ぼくがビルの屋敷に着いたのは、それから三〇分後のことだった。この狭いマンハッタンで、庭までついている立派な屋敷である。

ビルは、庭に面した大きな窓のある部屋の片隅で、蹲(うずくま)るように、ウイスキーを煽っていた。

部屋には、甘い匂いが充満している。香水、とかそんな気の利いたものの匂いではない。キャンディやチョコレート、クッキー、ケーキ……そんなお菓子の群れの、甘ったるい匂いである。

これから一〇〇人の子供がお菓子をねだりに来るのか、と思えるほどのお菓子の山は、そこら中に飾りつけられたカボチャや魔女の装飾と共に、賑やかな一日を演出している。

だが、その広い部屋の片隅で酒を煽るビルの姿は、空しい、としか言えないものであっただろう。
ぼくはとにかく窓へと向かい、酔いそうになるほどの匂いから逃れるために、大きく窓を開け放った。何しろ、甘ったるいお菓子の匂いと、ビルの煽る酒の匂いがごちゃまぜになっているのだから、気分が悪いこと、この上ない。
庭には、いつもガレージに入れてあるはずの、黒塗りの高級車が出してあった。誰かに磨かせておいたのか、いつも以上にピカピカである。きっと、恋人と出掛けるために用意していたのだろう。
ぼくは、ビルの前に身を屈め、時計を気にする素振りを見せながら、来たことだけを彼に告げた。

失恋　？

「可愛い子だったんだ」
ビルは言った。
酒のせいだけでなく、目が赤い。
「庭に車が出してあるだろう？　おれは今日、その車にあの子を乗せてやるつもりだったんだ」
そう言って、ビルは、グイ、っとウイスキーを飲み干し、また、グラスの中へと注ぎながら、取り憑かれたように喋り始めた。
「おれは小さい頃から恵まれていて、一流の生活、一流の教育、一流の身のこなし……何でも不自由なく持っていた。あの車もそうだ。九月の始めに買い替えたばかりなんだよ。――知ってるだろ？　前の車も悪くなかったが、今の車の方がずっと気に入っている。その車に、汚い手で触ろうとしているガキがいたんだ。まだ買い替えたばかりの頃だよ。おれは、仕事の付き合いもあって、鑑(み)たくもない個展に連れ出されていた。それでも、買ったばかりのあの車に乗って出掛けることができて、ちょっと気分が良くなっていたんだ。だが、その気分の良さも、その薄汚いガキのせいで吹き飛んだ。おれはすぐに、
『何をしているんだっ！』
って、そのガキを怒鳴りつけてやったよ。まだ小さい子供なんだ。近くで見ると、思っていたよりもずっと小さくて、何もそんなデカイ声で怒鳴ることはなかったな、って、後悔したんだ。だけど、前にも車に傷をつけられたことがあったから、おれも甘い顔はしなくて――。覚えているだろう？　白のベンツに乗っていた時だ」
「ああ」
ぼくが応えると、ビルはまたウイスキーを、グイ、っと煽り、息苦しそうに噎せ返った。
多分、ぼくが腕の時計を垣間見たことにも気づいていなかっただ

ろう。
「おれは、そのガキもてっきり車にイタズラをしに来たんだと思って、優しい言葉で追い払うこともせず、思いっきりきつい視線で睨みつけてやったんだ。小さな子供といっても、この街じゃあ、そんな子供がマリファナやコカインをやってることなんて珍しくもないからな。――だけど、そのガキは、おれが睨みつけるのを見ても逃げもせず、へへェ、と頭を掻いて笑ったんだ。こいつは脳みそが足りないんじゃないか、って思ったよ。おれが子供の頃なんか、大の大人に上から睨みつけられたら、怖くなって走って逃げたさ。最近のガキは、そんなことじゃ逃げないんだ。それどころか、
『このくるま、ぴかぴかだね。すごくきれいだね』
って、でっかい目をキラキラさせて言うんだ。ハッ、とするほどに可愛い顔をしてさ。アクアマリン、ってあるだろ？　その宝石みたいにきれいなブルーの瞳で、髪は眩しいくらいの赤毛で――。ああ、この子はきっと、大きくなったら金髪になるんだろうな、って思ったよ」
そこまで言って、ビルは思い出すように瞳を閉じ、しばらく自分の時間に浸っていた。
ぼくは、といえば、帰ってしまう訳にも行かず、仕方なく冷蔵庫から氷を取り出し、水割りを作って飲み始めた。話がすぐには終わりそうにない、と諦めたのだ。
「そのガキはさァ……」
と、ビルがまた話を始める。
「そのガキは、とんでもない馬鹿なんだよ。人に怒られてる、ってことが解っていないんだ。普通なら、車の持ち主が戻って来た地点で、ああ、自分はもうこの車から離れなくちゃならないんだな、って判断するだろ？　だけど、そのガキは離れないんだ。汚い手でベタベタ触ろうものなら、また怒鳴りつけて追い払ってやろうと思ったけど、触りもせずに、ただ眺めているだけなんだ。――で、おれも無下に追い払うことも出来なくて、さっき怒鳴りつけたことも、

何だか酷く悪いことをしたような気がして――いや、本当は悪いなんてこれっぽっちも思っていなかったかも知れないけど、とにかく、おれが悪者になるのは厭だったから、

『車が好きなのか？』

って、聞きたくもないことを訊いてやったんだよ。そうしたら、とびきりの笑顔でうなずくんだ。でも、その後すぐに、照れるようにはにかんで、本当は、こんな凄い車を見るのは初めてで、珍しくて見ていた、って言うんだ。そんなこと言われなくても、おれには最初から解っていたさ。薄汚れた、見窄らしい浮浪児みたいなガキが、黒塗りの高級車になんか乗ったことがあるはずないんだからさ。もちろん、近くで見たことだってないだろう。おれは心の底から、そのガキを馬鹿にしたよ。バワリーにいる貧困層の白人の子だろう、と。このまま大きくなったって、学校にも行かず、ドラッグに溺れて、ギャングか麻薬中毒者（ジャンキー）になるだけの子供なんだ。人間のクズだよ」

吐き捨てるように言っておきながら、ビルは、こぶしが白くなるほどに、きつく指を結んでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5935z/

帰去来

2011年12月21日14時45分発行